

# 使徒信条の学び

金 俊起・吉川 充

目 次	使徒信条 (SYMBOLUM APOSTOLICUM)	頁
1. 信じること	我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず。 Credo in Deum Patrem omnipotentem, Creatorem caeli et terrae.	1 - 2
2. 父なる神		3 - 4
3. 全能の父		5 - 6
4. 天地の造り主		7 - 8
5. 独り子イエス	我はその独り子、我らの主、イエス・キリストを信ず。 Et in Iesum Christum, Filium eius unicum, Dominum nostrum,	9 - 10
6. <sup>おとめ</sup> 処女マリヤより生まれ	主は聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ、 qui conceptus est de Spiritu Sancto, natus ex Maria virgine,	11 - 12
7. 苦しみを受け	ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、 passus sub Pontio Pilato,	13 - 14
8. 十字架につけられ	十字架につけられ、死にて葬られ、 crucifixus, mortuus, et sepultus,	15 - 16
9. <sup>よみ</sup> 陰府にくだり	陰府にくだり、 descendit ad inferna,	17 - 18
10. よみがえり	三日目に死人のうちよりよみがえり、 tertia die resurrexit a mortuis,	19 - 20
11. 天にのぼり	天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。 ascendit ad caelos, sedet ad dexteram Dei Patris omnipotentis,	21 - 22
12. 審きたまわん	かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん。 inde venturus (est) iudicare vivos et mortuos.	23 - 24
13. 聖霊を信ず	我は聖霊を信ず。 Credo in Spiritum Sanctum,	25 - 26
14. 聖なる公同教会	聖なる公同教会、 sanctam Ecclesiam catholicam,	27 - 28
15. 聖徒の交わり	聖徒の交わり、 sanctorum communionem,	29 - 30
16. 罪の赦し	罪の赦し、 remissionem peccatorum,	31 - 32
17. <sup>からだ</sup> 身体のよみがえり	身体のよみがえり、 carnis resurrectionem,	33 - 34
18. <sup>とこしえ</sup> 永遠の命を信ず	永遠の命を信ず。アーメン。 et vitam aeternam. Amen.	35 - 36

## 信じること

イエスは彼らに言われた。「あなたがたは、わたしをだれだと言いますか。」シモン・ペテロが答えて言った。「あなたは、生ける神の子キリストです。」 マタイ16:15-16

はじめに

私たちは、礼拝のたびに、使徒信条を唱えることによって信仰告白をささげています。使徒信条は、「父なる神、主イエス・キリスト、聖霊、教会、罪の赦しと永遠の命、を信じます。」と、わずか五つでキリスト教の信仰を簡潔に言い表わしています。でも簡潔なだけに、勉強しようにもなかなか適当な参考書が見当たりません。そこで私たちがなりに勉強を始めました。ご教示頂ければ幸いです。

### 1. 信じるとは

一定の対象について、そのあるがままを受け入れ信頼することを「信じる」と言います。過去や未来の事件、友人や家族、それに、神などがその対象になります。対象が何であれ、そのあるがままを受け入れ、信頼するわけです。宗教では、信じる対象が超越的な存在なので、対象への信頼は無条件で絶対的なものとなります。これを信仰と呼びます。

信じることの意味や、信じることが私たちに与える影響を考えてみましょう。

私たちは、生活の中で、友人を信じるとか恋人を信じるというように、信じるという言葉が頻りに使われます。友人の約束や恋人の愛の告白が変わらないと確信できるときに、こう表現します。

論理的・科学的に論証されることを事実として認めるときにも、私たちは信じると言います。地球が丸いことや、地球が太陽を中心に回っているということを、私たちは、自分では測定も体験も出来ないけれども、信じます。

宗教についてはどうでしょうか。一般的に宗教の教えを信じる場合、二つの姿が考えられます。一つは、体験を通して理解できるから信じるという場合です。例えば、生老病死が人間の避けられない苦悩であるというとき、それは、私たちが生活を通して体験し、確認できるから、信じられます。

反対に体験も証明も出来ないけれども信じる場合があります。例えばイエスの再臨がそうです。証明は出来ないけれども、私たちは、聖書に書かれた通りに信じています。このように、信仰には二通りの姿があります。

「信じる」対象は様々ありますが、例えば宇宙の原理や処世上の教訓、友人や恋人の言動などを信じるということは、宗教的な教えを信じるということよりも劣るものだと言えます。なぜなら、宗教的な教え以外のものは、人の生死に対して、ある程度の影響は与えても致命的にはならないからです。学説が変わったり友人に裏切られたりすることは、心痛むことではありますが、生死に決定的な結果を招くものではありません。しかし宗教における信仰は、それを信じる本人に決定的な意味をもたらします。つまり、宗教の教えの次元では、それを信じるか信じないかによって、その人が生きるか死ぬかという問題に直結するのです。

私たちは、理性をもって物事を認識し、理解し、判断しようとしています。理性に基づく論理的な物差しを当てて、それに合えば正確なもの、合わなかったら不正確なものだと決め込みます。そのような状況の中で、信仰と論理的な物差しとは、しばしば衝突すると思われています。

勿論信仰の領域の中でも、合理的で歴史的なものはあります。例えば、イエスが実在したことを疑う歴史家は、今日ではおりません。イエスが実在し、奇蹟を行なったことは、聖書だけではなく、当時の年代記や歴史書にも書かれている事実だからです。

しかし聖書の記述の中には、論理的な物差しだけでは認めることの出来ないものもあります。理性によっては考えられないこと、論理的ではないと思われることでも、信仰者たちは、その通りだと信じています。そして今度は、その信じることを物差しとして物事を判断するようになるのです。

ではこのような信仰を持っている人は、非常識で非合理的な人なのでしょうか。盲目的で狂った人なのでしょうか。あるいは、非現実的で神懸かり的な人なのでしょうか。少なくとも、神がないと思う人々はそう思うかも知れません。しかし、歴史上の多くの偉大な人物は、宗教家か宗教的信念を持っていた人々でした。例えば、五世紀の代表的な人物、アウグスティヌスは、千五百年もの間、欧米の精神文化に大きな影響を与えましたが、彼はキリスト教信徒でした。また現代物理学に大きな影響を与えたアインシュタインはユダヤ教信徒でした。このような人々を見ると、信仰者だということ、非論理的な人、非常識的な人と断定することは出来ないはずで

## 2. 使徒信条とは

信条という言葉は「私たちが信じる信仰の規範」という意味で、用いられます。ですから、信条は、私たちが信じている信仰と深くかかわっています。使徒信条は、その名称からイエスの弟子である使徒によって作られたように見えますが、実はそうではありません。現在の形になったのは八世紀頃のことです。使徒信条の原型と呼ばれるものが登場したのも、四世紀頃でした。このように、使徒の時代とはかなりの隔たりがありますが、どうしてこの信条を使徒信条と呼ぶのでしょうか。

初代教会には、教会の会員として洗礼や聖餐式に与れる人のために、一種の誓約がありました。それはまず、信仰を持って改宗する人のために作られた

ようです。作られた場所や時代によって、表現には多少の差はあったようですが、でもそれは、教会が持っている信仰の基本的な告白でありました。

この使徒信条という名称で呼ばれる信条は、その著者が使徒だとは言えませんが、少なくともかなり古くから、信仰の基本的告白として、教会に入ろうとする人々のための誓約として、用いられたものです。ですから私たちがそれを反復して暗唱することは、教会が千九百年以上も信仰の表現として用いてきた告白を、私たちもするということになります。何と素晴らしいことでしょう。

信仰の告白を基にして作られたこの使徒信条は、12項目になっています。その12項目は、告白の対象によって、次のように区分することが出来ます。

第1項目は、父なる神に対する告白で、私たちが信じている神は、全能の父なる神、天地の造り主であると告白します。

第2項目から第8項目は、御子イエス・キリストに対する告白がその内容です。その量から使徒信条がイエス・キリストを中心とする告白であることが分かります。

第9項目は、聖霊に対する告白で、とても簡潔です。第10項目は、教会に関する項目で、ここも簡潔に語られています。

第11項目は、「罪の赦し」という項目です。

第12項目は、「からだのよみがえり」と「とこしへの命を信ず」という項目です。後半の部分は、後から付け加えられたものです。

使徒信条には目立った特徴があります。それは、初めと終わりの項目が超自然的な内容であり、その間に、地上に関する現世的な内容の項目が挟まれているということです。二つの永遠的なものの間に、歴史的で現実的で体験的なものがあるということは、使徒信条が実に論理的でなお実際的であることを示すものであると言えます。

## 父なる神

しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。ヨハネ 1:12  
神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。あなたがたは、子としてくださる御霊を受けたのです。私たちは御霊によって、「アバ、父。」と呼びます。ローマ 8:14-15

聖書が語る神は、全能者であり創造者です。その神を、私たちが「父」と呼ぶことができることを、この項では考えます。

### 神の呼び名：

旧約聖書では、神の呼び名に、主としてエロヒム(神)とヤハウエ(主)が使われました。YHWHという子音だけで書かれたヤハウエは、ユダヤ人にとって発音してはいけない神聖な言葉で、そのためユダヤ人は、神聖四文字が出て来ると、「主人」を意味するアドナイと読み替えていました。そのうちに本来の読み方が分からなくなってしまいました。

余談になりますが、神聖四文字をエホバと読んだ時代があります。これは、宗教改革の頃、四文字にアドナイの母音符号をつけて読んでしまったことの名残で、現在の研究では、ヤハウエと読む方が本来の読み方に近いとされています。

### 1. 「父」という呼び名

「父なる神」という表現は旧約聖書にも記されています。しかし旧約聖書では、個人としてこう呼ぶことは許されないことで、イスラエルの民全体に対する表現としてだけ使われました。例えば、申命記 32:6、サムエル 7:14、イザヤ 63:16、エレミヤ 31:9などのように、神が民族や王の父であるとは記されていますが、個人の父と呼ばれた例はありません。イエスが神を父と呼んだときに、祭司長や

律法学者たちが、怒ってイエスを殺そうとしたのはこういう背景があったからです(参考:ヨハネ14:6-13、19:7)。

イエスは、神を「我が父」と呼びました(マルコ 14:36、ヨハネ 5:18、10:29)。大切なことは、神は、何よりもまず「我らの主イエス・キリストの父(エペソ 1:3)」であられるということです。だからこそ、その主イエス・キリストを受け入れた私たちにも「父」と呼ぶことが許されるのです。

ここから、「父になる神(父権・厳父)」という教えが始まります。神が私たちの父になられた、という「父権」に対する信仰は、私たちが神から生まれ、神がすべての命の根源であり、基であり、目標であることを認めることになります。

しかし聖書は、「父になる神」だけを教えるものではありません。神が父、という教えには、イエスを信じる人に対して、神が父としての愛情をもって彼らを助け、導き、交わる、「父である神(父性・慈父)」であるという、もう一つの面があります。そして、この教えがキリスト教信仰の大きな特徴となっているのです(参考:コリント 6:18)。

### 2. 父という呼び名の意味

#### (1)アバ

アバはアラム語で、幼児が父親に呼びかける時のパパに当たる言葉です。この言葉で神を呼んだのはイエスが最初です(イエスの日常語はアラム語)。初代教会の信徒たちも、主イエスになって、神をアバと呼ぶようになりました。

罪ある私たちも、キリストの十字架と復活により、神を「アバ(マルコ14:36、ローマ 8:15、ガラテヤ 4:6)」と呼ぶことが許されています(参考:エペソ 2:18)。いや、神を「アバ」と呼べるようになることこそ、私たちの信仰なのです。

## 言葉の解説

### (2)アガペー

ヨハネ 4：8と16は「神は愛である」と語っています。ここでの神の愛は、アガペーという言葉で表わされます。アガペーは「愛される価値が無いのに愛して下さる愛」という意味です。

アガペーの特徴は、マタイ 5：43 - 48を通して、知ることが出来ます。そこには神の愛が、人を差別なく愛する徹底したものであり、状況によって変わるものでもないことが示されています。そのことは次のようなことを通しても考えられます。

新約聖書は、神と私たちとの間に和解が必要であることを度々教えています。神と人間との間の敵対関係は、全面的に人間の不従順に原因があるのですから、神の側から和解の手を差し伸べる必要はもともありません。それにもかかわらず新約聖書が、どのようにしたら神と和解することが出来るか、ということについて繰り返し語っているのは、神には人間に対する変わらない愛がいつも流れている、ということを示すものです。

この神の愛アガペーを受け入れることこそ、「父である神」への信仰にほかなりません。それは、私たちが信じている神が、私たちに「よいものを与えて下さる神」であることを告白することです。ほとんどの宗教は、人間から何かを要求する神々を教えています。私たちが信じている神は、私たちの思いを超えて、与えて下さる方なのです。私たちが信じている神が「救いの神」であることを告白することです。私たちの本当の姿を見れば、神からさばかれるのは当然のことですが、私たちが信じている神は、罰するよりも救いをお与えになる方なのです。私たちが信じている神が私たちに「待っておられる神」であることを告白することです。ルカ15章は人間を捜しなお待つ神の姿を描いた有名どころです。悔い改める心を持って神のところへ帰ることを考えることは、難しいことではありません。

### 【愛】

「愛」はキリスト教の中心的テーマの一つですが、「愛」を意味するギリシア語は、アガペーのほか、フィリア、ストルゲー、エロースと、全部で四つもあります。このうち新約聖書に使われているのは、アガペーとフィリアです。

#### (1)アガペー

アガペーは、動詞の形で 120回以上、名詞の形で 100回以上も新約聖書に出てくる特別な言葉です。

その意味を聖書から学んでみますと、

神ご自身は愛です（ヨハネ 4：8・16）。

愛ゆえに、神は、私たちに救うために御子を世に遣わされました（ヨハネ 3：16）。

聖霊によって、神の愛は私たちの心に注がれます（ローマ 5：5）。

その結果、私たちは、何よりもキリストにあって神を愛するようになり（ルカ16：13）、

神がキリストにあって私たちに愛されたように、互いに愛し合うようにされます（コリント13：4 - 7）。

「神からの愛」が原意ですが、全くの一方的な愛ですから、この言葉を人と人との間に使うと、「私たちに對するキリストの愛のような愛」ということになり、「無償の愛」と訳すこともあります。なお変わったところでは、信ずる者同士が共にする食事（愛餐）もアガペーです（ユダ12）。

#### (2)フィリア

「わたしよりも父や母を愛する者　わたしよりも息子や娘を愛する者（マタイ10：37）」や「宴会の上座や会堂の上席が大好き（同23：6）」など、肉親への愛・友情・好みなどを示します（同 6：15、ヨハネ15：19、コリント16：22、黙示録22：15）。

#### (3)ストルゲー

「肉親愛や骨肉の情」を表わします。

#### (4)エロース

「男女間の自然の愛や恋愛」を表わします。

## 全能の父

主はアブラムに現われ、こう仰せられた。  
「わたしは全能の神である。あなたはわたしの  
前を歩み、全き者であれ。」 創世記17：1  
私たちの神は、天におられ、その望むところ  
をことごとく行なわれる。 詩篇 115：3  
するとイエスは言われた。「できるものなら、  
と言うのか。信じる者には、どんなことでも  
できるのです。」 マルコ 9：23  
イエスは、彼らをじっと見て言われた。「そ  
れは人にはできないことですが、神は、そう  
ではありません。どんなことでも、神にはできる  
のです。」 マルコ10：27

全能の神：

創世記17：1の「全能の神」は、ヘブル語でエル・シャダイです。エルは神の通称で、シャダイは、山(シャドウ)を語源とする言葉です。山は、神の力と威厳のシンボルとしてよく使われましたから、エル・シャダイは、神を山の上に立つ力の神、全能の神として表現したことになります。この御名は、イサク(同28：3)とヤコブ(同35：11、43：14、48：3)にも、啓示されるか、親から伝えられるかしています。

聖書には「全能の神」という表現はありますが、「全能の父」という表現は見当たりません。それなのに使徒信条は、神を「全能の父」と告白します。この項では、「全能性」について考えながら、同時に、なぜ「父」なのかを考えます。

### 1. 神は何でもなさるのか。

#### (1)「全てが可能である」

「全能」ということは、「全てが可能である」ということです。こう言うと、神が無条件に「何でも出来る」のだと勘違いして、神が、善だけでなく悪までも出来る、合理的な行為をなさる反面、感情的

になって、悪いことまでもなさるに違いないと言いつ出す人が出て来るかも知れません。

神は、美しいものを造り、それを維持されます。自然界を見ると、私たちはそのことを感じ、体験することが出来ます。しかし、「何でも出来る」という言葉から、神は美しくないこと、汚いことをもなさる、という理解が生まれかねません。

多くの宗教は神々が善だけでなく悪までも行なうと説きます。私たちが告白する神も、それらの神々と同じように、私たちが考える次元での「全て」をなさるのでしょうか。

### (2)神の「全能」とは

使徒信条で告白する「全能」は、私たちの次元での考えとは違うものです。聖書が語る神は、絶対的な善、聖、愛などを本性とされる方で、「常に真実で ご自身を否むことができない(・テモテ 2：13)」方です。神は「全て」をなさることが出来ますが、本性に反することまではなさらないのです。

### 2. 父である神の愛と全能性

ここで重要なことは、使徒信条が「全能の神」とは言わずに、「全能の父」と言っていることです。前回学んだように、「父である神」は、父としての愛情をもって、私たちを助け、導き、交わって下さる方です。「救いの神」であり、徹底した愛の神であります。その慈愛に満ちた「父である神」の御心の中で「全てが可能である」、と告白するのです。

マルコ 9：23でイエスが、悪霊のために引き付けを起こす子供の父親に「信じる者には、どんなことでもできるのです。」と言われたみ言葉と、同10：27の「どんなことでも、神にはできるのです。」のみ言葉から、私たちは、「全能の父なる神」が働いて下さるなら、不可能なことも可能にされるという信仰に導かれます。「父である神」の愛と全能性に対する全面的な信頼であります。だからこそ「神」ではなくて「父」なのです。

### 3 . 神の全能性に対する信仰

私たちには「神には全てが可能だ。」ということ  
を、何となく、死に至る病にかかったときや、大きな  
災難に遭遇したとき、素晴らしい体験をしたとき  
に限って、素直に認めたり告白したりする傾向があ  
ります。普通の生活の中では、神の全能性と私たち  
とは全く関係が無いかのように振る舞ってしまいま  
す。挙げ句の果てに、神の全能性を確かめるために  
何か神の奇蹟を体験したいと願う始末です。

確かに神は奇蹟を行なわれる方です。しかし同時  
に、人間に自ら問題を解決して行くようにと知恵を  
与え、また、自然法則や文化や文明を用いるように  
して下さいました。神は、人類の歴史の中に介入し  
干渉されますが、人間が出来ることは人間に任せら  
れます。神の奇蹟は、人間の自主性を無視する一方  
的なものではないのです。神は、ご自身がよしとさ  
れる場合には、それこそ奇蹟的に、自由に行動を起  
こされます。

父なる神の全能性についての信仰は、順境のとき  
だけのものではありません。逆境にあってもなお、  
父なる神の愛を信じつつ、これから先に向けての神  
の意図を知ろうと祈るものであります。

またその信仰は、どのような状況にあっても謙虚  
に神に拠り頼む、信頼と忍耐と希望を私たちに与え  
てくれるのです（参考： ペテロ 5： 6 - 7）。

### 4 . 神の愛への信頼

前回学びましたように、神の愛アガペーは、「愛  
される価値が無いのに愛して下さる愛」で、それを  
受け入れることが「父である神」への第一歩です。  
この「父である神」の愛への信頼が、私たちの周り  
に起こるすべてのことに神の恵みを感じ、「全能の  
父なる神」と告白する信仰につながります。父なる  
神の愛に信頼し、そして告白する、それこそが信仰  
なのです。

## 天地の造り主

初めに、神が天と地を創造した。

創世記 1: 1

信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。

ヘブル11: 3

私たちは神の作品で

エペソ 2: 10

### 1. 天地の造り主

この言葉で、私たちは「全能の父なる神」が天地の創造者であるという信仰を告白します。使徒信条で「天地」という言葉は、神以外の存在のすべてを意味しますから、「天地の造り主」と告白することによって、父なる神がご自身以外のすべての存在の唯一の起源であることを認めることとなります。

1970年頃からの地球科学の発展の中で、例えば、地球が46億年前に誕生したというようなことが言われ出しましたが、使徒信条はそういうことについて論じているわけではありません。

科学は過程を説明できても、根源までは遡れません。使徒信条は、「全能の父」と「天地の造り主」を続けて告白することによって、父なる神が、その根源的なところで、無からすべてのものをお造りになったと告白しているのです。

### 2. 創造か進化か

宇宙万物の始まりについては、全く相反する二つの説で説明されてきました。一つは、混沌であった状態から見える宇宙が漸進的に発展してきたという説です。このような考え方は、18世紀に無神論者や唯物論者が言い出し、その後科学者たちによって展開されてきました。もう一つは、この宇宙が既存のものから進化したのではなく、何も無い無の状態から神によって創造されたという説です。この二つの説には、それぞれ長短があります。

### (1) 漸進的發展説

この説には、私たちの理性や常識で理解しやすい面があります。例えば私たちは、既存の物を使って何かを作ることが出来ますが、何も無いところからは作れません。このような経験で育てられた感覚からは、この説が、より合理的で客観的なものであるかのように見えます。また、例えば最近のDNAの研究なども、この説の枠組みの中で話されることがあります。

しかし問題は、この説が人間と人間以外のものとの本質的な差を否定していることです。現在の人間が、自然の進化の一つの過程に過ぎない存在ということになって、結果的に、この説が人間の尊厳性を否定することになっています。

### (2) 突然発生説

突然発生説は、漸進発生説の短所を克服する長所があります。この説は、「人間と人間以外の存在の間には根本的な差がある。いくら動物が進化しても人間にはなれないし、人間がいくら頑張っても神にはなれない。今の人間や宇宙も、偶然の産物ではなく、最初から神のご計画によって、今のような形を持って造られた。」と説きます。

神が宇宙万物を創造された、ということは、その神が「全能なる方」であると信じることによって、簡単に理解することが出来ます。

しかしこの説には、無から有を創造できるという、私たちの認識を超える考えを要求することや、生物の変化(それが進化かどうかは別にして)について十分な説明が出来ないという短所があります。このように説明しにくい面もありますが、聖書は、神が宇宙万物を創造されたと教えます。

### 3. 造り主を信じる

造り主である神を信じ告白することは、同時に、私たちがその神を信じて生きる、その生き方を知ることでもあります。

### (1)自分を誇らない

造り主である神を信じると、私たちは、自分が神によって造られ(エペソ 2:10)、丸ごと救われ、生かされていることを認めるようになり、従って、自分を誇らず、喜びも悲しみも、すべて神にお任せして生きるようになります。

いったいだれが、あなたをすぐれた者と認めるのですか。あなたには、何か、もらったものでないものがあるのですか。もしもらったのなら、なぜ、もらっていないかのように誇るのですか。  
コリント 4: 7

### (2)すべてのものに謙虚

造り主である神を信じると、私たちは、すべてのものが神によって造られていて、それを護ることが私たちの責務であると考えようになり、従って、すべてのものに謙虚になります。

神が造られた物はみな良い物で、感謝して受けるとき、捨てるべき物は何一つありません。  
テモテ 4: 4

### (3)神と共に働く

造り主である神は、人間を神のかたちに似た者として造られました(創世記 1:26)。このことは、人間には、造り主に似た特殊な存在としての価値があり、人間がその価値を発揮できる存在であることを意味します。聖書は、人間が神と共に働く協力者になれると語っています。

私たちは神の協力者であり、あなたがたは神の畑、神の建物です。  
コリント 3: 9

## 4. 救いの確信

全能の父なる神を造り主と信じることは、私たちに、主イエス・キリストに従う者に与えられる救いを確信させます。神は私たちの造り主であり、その神に拠り頼んで生きる私たちを、その愛のゆえに、必ず救って下さるからです。

## 独り子イエス

マリヤは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方こそ、ご自分の民をその罪から救ってくださる方です。 マタイ 1:21  
私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

ヨハネ 1:14

### 1. 神の独り子

私たちは、主イエスを信じる信仰のゆえに神の子とされた、いわば養子です(ローマ 8:14-15)。しかしイエスは、永遠からの、生まれながらの神の子ですから、使徒信条は、「神の子」と言わずに、「神の独り子」と告白します。神に造られた養子ではなく、神から生まれた実子だということです。

新約聖書で、イエスを「ひとり子」と呼ぶのは、ヨハネ 1:14・18、同 3:16・18、ヨハネ 4:9の5箇所、マルコ 1:11と同 9:7の「わたしの愛する子」と同じ意味、つまり、イエスが父なる神と一対一の特別な関係にある方である、という意味で使っています。御父と御子のこの関係について、ヨハネの福音書は、次のように教えています。

イエスは神と等しい存在ですが(5:18、10:30・38、14:9・10・20、17:21)、

父なる神から地上に遣わされました(12:49)。

神から来られた方であることは、神ご自身が認証(認めて証明する)されます(6:27)。

イエスは、神を父として知っておられ、ご自身を通して神を現わされます(1:18、5:20)。

イエスは、御子として永遠のいのちの賜物を御父から授けられており、それを信じる人々に分かち与えられます(5:26)。

また、すべてのさばきを、父なる神から委ねられています(5:22)。

### 2. 我らの主 イエス キリスト

四つの言葉で構成されている「我らの主イエス・キリスト」に対する告白について学びます。

#### (1)我ら

この言葉は、日常生活でよく使われるので、特別な意味などなさそうですが、使徒信条で「我ら」というとき、それは、この告白が個人的な確信だけでなく、他の人も同じ確信を持ち、共に告白する共通的なものだということを意味します。現に私たちが告白しているこの告白は、二千年前、イエスの弟子たちが告白したものであり、二千年の間、全世界の教会が告白してきたものであります。「我ら」には、イエスを信じるすべての人が含まれているのです。

#### (2)主

聖書の中で「主」という言葉は、召使が主人に、部下が上司に、臣下が王に対して使う言葉でした。広く使われ過ぎて、混乱を起こしたこともあります(参考:マタイ22:41-46)。しかし、使徒信条の「主」という言葉には、二つの特別な意味が含まれています。一つは、私たちが神を主と呼ぶのと同じ意味、つまり、御父と御子が一つであり(ヨハネ10:30)、イエスこそ真の神であるという告白です。もう一つは、イエスが救い主であるという告白です。当時の宗教には救い主という概念が無かったので、この告白は、イエスが救い主であるという強い確信の下でなされたのです。

#### (3)イエス

「イエス」は、ヘブル語のヨシュア(主は救い)という名前がギリシア語化したものです。ユダヤではよく付けられた名前ですが、イエスという名前が神の御子に付けられたことには、特別な意味があります。それは文字どおり、この方こそご自分の民をその罪から救って下さる神(マタイ 1:21)であるという啓示的な意味があるからです。

#### (4)キリスト

「キリスト」は、ヘブル語のメシヤ（油注がれた者）という言葉のギリシア語訳です。ユダヤでは、初代の王サウルが預言者サムエルから油を注がれた（サムエル 9：16 - 10：16）ように、王や預言者選ばれた人は、香油を注がれて祝福されました。

やがてユダヤの人々は、長い苦しみの中で、この苦しみから自分たちを解放してくれる、真のメシヤ（=救い主）の出現を待ち望むようになりました。そのような中で、使徒ペテロの、人として初めてのキリスト告白が生まれたのです（マタイ16：16）。

### 3．我らの主、イエス・キリスト

次に、四つの言葉が二つに分けて使われるときの意味と重要性について考えることにします。

#### (1)我らの主

この言葉は、弟子たちが「主」と告白したイエスが、私たちの主でもあるということを示しています（ローマ10：9 - 10）。これは、いい加減な態度で口にする事の出来ない、厳粛な告白です。

#### (2)イエス・キリスト

イエスが実在したことだけを強調し、一人の人間に過ぎなかったと考える人がいます。新約聖書の中でも、イエスを普通の人として考えた人々がいたと教えています（マルコ 6：3）。しかしそのような人々も、イエスが十字架上で死んで復活されたことを見たり聞いたりしたことで、イエスを「イエス・キリスト」と呼ぶようになります。使徒パウロも、そうでした。パウロは、最初、イエスを普通の人と思っていたが、復活のイエスに遭遇してから、イエスがキリストである、という信仰を持つようになりました（使徒 9：3 - 22）。

「イエス・キリスト」と呼ぶことは、「あなたにしか救いがありません。ついて行きます。」と告白することでもあるのです。

## おとめ 処女マリヤより生まれ

イエス・キリストの誕生は次のようであった。その母マリヤはヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうちに、聖霊によって身重になったことがわかった。

マタイ 1:18

ユダヤの婚約:

ユダヤでは、婚約期間は結婚と同じように神聖視され、法律上も夫婦と同様の取扱いを受けました。婚約期間は約一年間で、婚約中の女性の不貞行為は死罪でした(申命記22:23-27)。このような背景の中で、ヨセフは、マリヤの妊娠を知って、「内密に去らせようと決め(マタイ 1:19)」しました。

既に夫のヨセフ(同 1:19)・妻マリヤ(同20)と呼ばれていますが、実際に夫婦生活に入るのは、婚約期間が終わって、婚礼を挙げてからです。

### 1. 処女降誕

聖書は、処女降誕によってイエスが神の子であることを証明しようとしているのではなく、イエスが神の子であることは周知のこととして、その誕生に神が働いておられる事実を淡々と語っています。

#### (1) マリヤの立場から(ルカ 1:26-38)

マリヤは、「まだ男の人を知りません(34節)」でした。ある日突然、御使いが、神から遣わされて「聖霊があなたの上に臨み、生まれる者は神の子と呼ばれます(35節)」と告げます。彼女は驚きますが、結局「ほんとうに、私は主のはしためです。どうぞあなたのおことばどおりこの身になりますように(38節)」と答えます。

こうしてマリヤは、婚約期間中に、聖霊によってイエスを受胎しましたが、ヨセフは、暫くしてから知らされたようです。それは、マリヤが誰にも相談せず、ただ主にすべてを委ねていたからです。

#### (2) ヨセフの立場から(マタイ 1:18-25)

ヨセフがマリヤの妊娠を知ったのは、「ヨセフの妻と決まっていたが、ふたりがまだいっしょにならないうち(18節)」でした。「ヨセフは正しい人であって、彼女をさらし者にはしたくなかったので、内密に去らせようと決め(19節)」しました。しかし「彼がこのことを思い巡らしていたとき、主の使いが夢に現れて 恐れなくてあなたの妻マリヤを迎えなさい、その胎に宿っているものは聖霊によるのです(20節)」と告げました。

「ヨセフは、主の使いに命じられたとおりにして、その妻を迎え入れ(24節)」ます。そして、「子どもが生まれるまで彼女を知ることがなく、その子どもの名をイエスとつけ(25節)」しました。

このように見てきますと、処女降誕は、「イエスを聖霊によって受胎した」という、ヨセフとマリヤの信仰告白であり、それを使徒信条が今日まで伝承してきた、と言えるのです。

### 2. 聖霊によりてやどり

「聖霊によりてやどり」は、「聖霊の働きで受胎され」ということで、イエスの誕生に関与したのは聖霊であって、ヨセフではなかった、ということを告白する言葉です。

「聖霊」は、神の創造の力であって、天地を造られました(創世紀 1:2、詩篇33:6)。その創造の新たな働きによって、イエスはマリヤの内に宿りました。こうして、永遠の神の子が「真の神にして真の人」になられたのです。

処女降誕の物語は、一人の処女が神の子を産んだということだけではなく、この、聖霊によってそのことが起こったということが重要です。イスラエルから離れておられた聖霊が、再び働きかけられたのです。ここに、神による救いが始まり、メシヤ時代の到来が示されたのです。

### 3. 処女マリヤより生まれ

#### (1) 預言の成就として

マタイは「見よ。処女がみごもっている。そして男の子を生み、その名を『インマヌエル』と名づける(イザヤ 7:14)。」を引用して、「このすべての出来事は、主が預言者を通して言われた事が成就するためであった(1:22)。」と語っています。

聖書は、処女降誕が、偶然でも突然の出来事でもなく、旧約聖書の預言の成就であり、したがって、神によるものであることを、一貫して示しています(ある学者は、旧約聖書に、イエスの降誕に関する預言が 456箇所もあると語っています)。

#### (2) 処女マリヤより

人となった神を説く宗教は少なくありませんが、その神々は、女性との肉体関係を経て誕生したり、神話の中だけの存在であったりしました。しかし、イエスは、聖霊の御業により、処女マリヤの子として、歴史の中に入り込んで来て下さったのです。

#### (3) 生まれ

神の独り子イエスが生まれる必要があったのか、という疑問があるかも知れませんが、でも「生まれること」がなくては「死ぬこと」もないのですから、「生まれた」のは、イエスが来られた目的である、私たちの救いのため、十字架の上で「死ぬ」ためであったことが分かります。

使徒信条の処女降誕についての告白は、イエスをキリストと信じる信仰を堅く保つためのものです。

「聖霊によりてやどり、処女マリヤより生まれ」と告白することによって、私たちは、神の御子であるイエスが人間になられたということ、それも私たちの罪を救うためにこの世に遣わされたということに思いを致します。使徒信条のこの告白は、キリスト教の重要な教えである「救い」の土台を、私たちに示してくれるものなのです。

## 苦しみを受け

こういうわけで、ピラトはイエスを釈放しようとして努力した。しかし、ユダヤ人たちは激しく叫んで言った。「もしこの人を釈放しようとするなら、あなたはカイザルの味方ではありません。自分を王だとする者はすべて、カイザルにそむくのです。」 ヨハネ19:12

ポンテオ・ピラト:

ユダ王国は、紀元前586年、バビロンに滅ぼされました。紀元前168年に、一旦独立を勝ち取りますが、紀元前63年にはローマ帝国の属州となります。ローマ帝国は、紀元前37年にヘロデ王を立ててユダ地方を統治させますが、彼の没(紀元前4年)後、その子アケラオが残忍・無能だったので、紀元6年にこれを追放し、以後、直接ローマから総督が派遣されて、この地方を治めることになりました。

ポンテオ・ピラトは、ユダ地方の5代目の総督として、紀元26年から36年まで治めました。ヘロデの死の直前にお生まれになった(マタイ2:1-19)イエスは、ピラトが総督に在任中の紀元29年か30年に、ピラトによって十字架につけられました。

### 1. ポンテオ・ピラトのもとに

使徒信条は、イエスの三十数年の生涯を、「処女マリヤより生まれ」と「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」の2項目でくくります。ポンテオ・ピラトに余程の意味があるに違いありません。

「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」という言葉によって、使徒信条は、一つには、イエスの受難が具体的な日付を持った出来事である、ということを示しています。古くから教会は、事あるごとに、「イエスは、ポンテオ・ピラトのもとで苦しめられ、殺された方」と言って、イエスの苦しみを、歴史的な出来事として思い起こして来たのです。

使徒信条にピラトが登場するもう一つの理由は、彼がイエスを死に定めた張本人だということです。

最初、イエスを裁判に送り込んだのは、ユダヤ人の宗教的な権威者たちでした。ピラトは、自分たちの律法によって裁けと言ってはねつけますが、人を死刑にする権限が無かったユダヤ人たちは、それを聞き入れません。結局、ピラトは裁判の席に着き、そして無実のイエスを死に定めたのです。

使徒ヨハネは、この裁判に臨んだピラトの態度をよく語っています。ヨハネ19:12にそれが要約されていると言えますが、彼はこの裁判にかかわりたくなかったのです(同18:31、19:6)。

ピラトは、同18:38、19:4・6と3回もイエスの無罪を宣言しています。イエスが神の子であるということも彼を恐れさせました(同19:7-8)。それに、彼の妻は、イエスの無罪を夢で警告されていました(マタイ27:19)。しかし彼は、ユダヤ人に「皇帝に言い付けるぞ。」と脅かされて、最終的には死刑の判決を下したのです。

「疑い深い暴君」と呼ばれている皇帝テベリオスを恐れるあまり、彼は、忠誠心を疑われないように、自分の身の安全という利己的な配慮によって、判決を下しました。彼は真理が何であるかを知っていたのに、それに目を塞ぎ、自己保身に走ったのです。

このようなピラトに、同情を感じる人がいます。それは、彼が、運悪くイエスの裁判を担当するようになった、とも言えるからです。それに、ピラトが死刑の判決を下したのは、ユダヤ人に脅かされたことでした。もし私がピラトであったら、同じようなことをしたかも知れません。私にもピラトのような傾向が無いとは言えないからです。

そうではあるけれども、正義を行なうために立てられたはずの裁判官が、無実のイエスを死に定めたのです。どんな事情があつたにしても、ピラトは、その責任を負わなければなりません。

## 2. 苦しみを受け

使徒信条は、イエスの生涯について、誕生以外はみな省略して、「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」の一言で括ってしまいますが、それでは、「苦しみを受け」とは、いったい何を意味しているのでしょうか。

イエスの生涯を思い浮かべてみますと、馬小屋での誕生（ルカ 2：7）、シメオンの預言（同 2：34 - 35）、郷里での挫折（同 4：24）など、「苦しみを受け」という言葉で語られるような生涯でした。

イエスは、このように苦しみの中に生まれ、苦しみを受け続けて成長され、伝道をなさり、最後まで苦しみを受け抜かれて、生きられました。私たちと同じ肉体をお持ちになったイエスが、そのすべての面で苦しまれたのです。いま私たちに降り懸かっているはずの神の怒りのさばきを、私たちの代わりに完全に担って下さるために、です。

イエスは、このような苦しみの中で、その終わりの時に、特に深い苦しみを受けられました。そこで使徒信条は、イエスの全生涯を「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け」と言い切り、私たちがそれを告白するのです。

## 3. 神の救いの御業

イエスは、ピラトに「もしそれ（ピラトの権威）が上（父なる神）から与えられているのでなかったら、あなたにはわたしに対して何の権威もありません。（ヨハネ19：11）」と答えておられます。これは「イエスを許すのも殺すのも、神がお許しにならなければ、ピラトだけではどうにも出来ない。一連の騒ぎのすべてが、神の救いの御業の中に組み込まれている。」と語られたものです。

イエスは、この世の裁判官による裁きをお受けになりながら、実は、人間を罪から解放放つ神の救いの御業を実現されたのです。ピラトの時代に、神のご計画によって、それは成就しました。

## 十字架につけられ

キリストは、私たちのためにのろわれたものとなって、私たちが律法ののろいから贖い出してくださいました。なぜなら、「木にかけられる者はすべてののろわれたものである。」と書いてあるからです。 ガラテヤ 3:13

十字架による死刑：

十字架による死刑の方法を最初に考え付いたのはペルシア人です。彼らは、大地を神オルムズに捧げられた聖なるものと考えていたので、汚<sup>けが</sup>されないように、死刑囚を地上から離れたと言われていました。十字架刑は、ペルシアから北アフリカのカルタゴに伝わり、ローマにも伝えられました。

ローマでは、謀反人や奴隷や身分の低い重罪人を十字架につけ、市民権を持つ者には使いませんでした。十字架刑は最も残酷で屈辱的な死刑でしたが、ローマ皇帝コンスタンティヌス一世が、イエスの死に対する信者たちの信仰に配慮して、337年頃に、これを廃止しました。

十字架の親柱は、3mほどの高さで、刑場に立てられたままです。横木は、死刑囚が自分で背負って行かされます。死刑囚は、両手両足を釘で打ちつけられましたが、内臓が直接損傷されていないので、死ぬまで、長い時間、出血や渴きや激痛にさらされました。大抵の場合、2日から3日掛かって死んだそうです。イエスの場合は約6時間でした。

### 1. 十字架につけられ

十字架による死刑は、最も残酷で屈辱的なものというだけでなく、聖書によって、神に呪われるべきものと宣言されています(申命記21:22-23、ガラテヤ3:13)。イエスは、私たちの罪を贖うため、この呪いの十字架につけられ、神への供え物としてご自分の命をささげられました。このイエスの死に込められた意味を、二つの面から学びます。

### (1) 呪われた死に方

十字架の死の第一の意味は、イエスの死が呪われた死に方であった、ということです。

イエスは、私たちの身代わりとして十字架につけられました。もし十字架が無かったら呪われた存在のままであった私たちの代わりに、イエスが呪われて死なれたので、私たちに対する神の呪いは、もうなくなったのです(ガラテヤ3:13)。

私たちは、もはや神の怒りを恐れる必要がなく、御恵みを信じて、神と交わることを喜びながら、生きられるのです(ローマ5:8-11)。

### (2) 悲惨な死に方

もう一つは、イエスの死が悲惨な死に方であったということです。苦難の道(ヴィア・ドロサ)をゴルゴタまで歩かれる御姿や、「わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか(マタイ27:46)。」という十字架上の切迫した叫びは、まさに悲惨そのものでした。

当時の人々にも、イエスの十字架の死は悲惨な死と受け取られました。あれほどの奇蹟を行なった方だから、例えば十字架から降りてくるとか、天使の手助けの中で死ぬとかいう具合に、超自然的な方法での死に方を見せることが出来たはずではないか、というのです。

しかしイエスはそうはされませんでした。イエスは、ご自分が十字架で死ななければ、多くの人が救われることはないと確信されて、十字架に向かって進んで行かれました(マルコ8:31-10:34)。

イエスは、「自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまで従われたのです(ピリピ2:8)。」こうしてイエスは、「ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられた

(同2:7)」ことを示されました。だからこそ私たちは、十字架のイエスを通して、イエスの存在をより身近に感じ、イエスこそ救い主だ、と告白することが出来るのです。

## 2. 死にて葬られ

### (1) 死にて

イエスの死は、病気や事故によるものではなく、単なる殉教でもありません。罪人が負うべき刑罰を身代わりとして受けられた刑罰死です。

律法の呪いを知る者にとって、死は恐ろしいものです。しかしイエスは、私たちと同じ肉体を持たれて十字架の死を遂げられることによって、私たちの救いを完成して下さいました。死は私たちにとってはや罪の呪いではなくなり、私たちは、死の恐怖から解放されたのです（ヘブル 2：14 - 15）。

### (2) 葬られ

マタイ27：57 - 61によると、イエスの埋葬には、アリマタヤのヨセフとマグダラのマリヤともう一人のマリヤの三人しか、立ち会っていません。こんな寂しい葬式なのに、使徒信条は、イエスが死なれたと言い切らずに、「葬られ」を付けました。なぜでしょうか。

使徒信条が作られた頃、「神の死などあり得ない。イエスの死は仮の死に違いない。」と考える人々がいて、それを否定するために、この言葉を付けて、「本当に死なれた」と念を押したらしいのです。

確かにイエスの死は難問です。しかし、イエスの死が無かったら復活も無く、したがって、私たちの救いも無かったのです。私たちは今、「葬られ」と告白しながら、イエスが私たちのために死なれた、という思いを新たにし、イエスが死の恐れを通過下さったお蔭で罪の償いが完成したことを、改めて感謝するのです。

「十字架につけられ、死にて葬られ」という言葉に込められている出来事は、神の救いの御業です。神が、独り子を世におくり、十字架につけられたのです。神は、私たちの罪を見ごしにされるのではなく、罪の重荷全体を引き受けて下さったのです。代価を払って下さったのは、神ご自身です。

## 陰府にくだり

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちが神のみもとに導くためでした。その霊において、キリストは捕われの霊たちのところに行ってみことばを宣べられたのです。 ペテロ 3：18 - 19

### 陰府と地獄：

旧約聖書は、人間は死んでもすぐには消滅せず、地上の存在から全く隔絶された場所に一時的に留まると述べています。この死者の地を、ヘブル語ではシェオル、ギリシア語ではハデスと言います。この言葉を、墓の意味で使っている場合もありますが、いずれも死者の領域に違いありません。このハデスの訳語が陰府で、地獄とは別のものです。

地獄は、ギリシア語でゲヘナと言います(マタイ 5：29・30、10：28)。ゲヘナはヒノムの谷(ゲン・ヒノム)から出た言葉です。ヒノムの谷は、エルサレムの南西にあって、昔、ここで異教の神モレクに子供を焼いてささげた(参考：列王記23：10)ことから、罪と恐怖の代名詞となりました。その後幼児犠牲が禁止され、ここが廃棄物や罪人の死体の焼却場に当てられたため、ゲヘナは、悪人の最終の刑罰の場所、つまり地獄の同意語となりました。

### 1. 陰府にくだり

この項目は使徒信条の原形には無かった項目で、4世紀の中ごろに加えられたようです。見たところ「死にて葬られ」の付け足しのようで、この項目を括弧の中に入れて他の項目と区別した、使徒信条を使っている教会もあります。でも加えられたということは、加える必要があったということです。

そこで、まず新約聖書の「陰府にくだり」に関係のある箇所を学んでみます。

パウロは、エペソ 4：8 - 10で、キリストがまず地の低い所に下られ、それから天に上られた、と語って、陰府に下られたことに触れています。

ピリピ 2：10 - 11では、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてがひざをかがめ、すべての口が「イエス・キリストは主である。」と告白すると語り、陰府にも御恵みが及んでいるとしています(参考：黙示録 5：13)。

ペテロは、詩篇16：10を引用して(使徒 2：27)、キリストがハデスから復活されたと語っています(同 2：31 - 32)。

ペテロ 3：18 - 20と 4：6では、キリストが、復活される前に、霊において生かされて、ハデスに捕われている霊たちに宣べ伝えた(救いの勝利を宣言した、私訳)と語っています。

ヨハネは、黙示録 1：18に、「わたしは 死とハデスとのかぎを持っている」という、死に打ち勝って陰府の主権者になられた、キリストの宣言を記しています。

### 2. 「陰府にくだり」に対する諸理解

「陰府にくだり」について、キリスト教会の先達は、次のように考えました。

初代教会の指導者の多くは、キリストが「陰府に下った」のは、そこに捕われている霊たちに福音を宣べ伝えるためであると考えました。

ルターは、死と滅びの力に対するキリストの勝利を意味する、と考えました(参考：コリント15：55 - 57)。

カルヴァンは、私たちが受けるべき刑罰や苦痛の代わりに、キリストが十字架上で地獄の苦しみを味わわれたことを意味する、と考えました。

### 3. 「陰府にくだり」の理解のために

それでは、「陰府にくだり」と告白することは、私たちにとって、どんな意義があるのでしょうか。このことを考えるためには、

「陰府」を死者の領域と、はっきり認識する必要があります。

「くだり」という言葉は、上に天、下に死者の地、その間に地球があるという古代の宇宙観に沿った表現です。この言葉を、そういう物理的理解から解放する必要があります。

その上で、キリストが「陰府」で何をなされたか、と考える必要があります。

初代教会が受けた迫害の影響も忘れられません。

ローマでは、皇帝のネロ（54 - 68年在位）からディオクレティアヌス（284 - 305年在位）に至るまで、いわゆる10大迫害が続きました。それに、「陰府にくだり」が挿入された頃には、ペルシアでゾロアスター教徒による迫害がありました。

そのような中で、キリストが陰府の主権者になられたと告白することは、慰めであり、励ましであったことでしょう。もはや、神の民は死を恐れなくてもよいのです。

#### 4 . 御恵みの支配

葬儀の時によく読まれる詩篇 139 : 8は、死んで陰府に行った者が、ここまでは、神の御手が及んでいないだろうと諦めていたら、そこにも主なる神がおられた、と歌っています。

「陰府にくだり」は、確かにキリストの死を強調する言葉ですが、同時にキリストが行かれない所はどこにも無い、陰府さえも御恵みの届く所になったという喜びの告白でもあるのです。たとえ死の彼方であっても、御恵みの届かない所は、もはや何処にも存在しないのです。

キリストが打ち勝たれた力は、死後の世のものだけではありません。私たちがこの世で遭遇している滅びの力に対しても、キリストが、共に戦っていて下さいます。「陰府にくだり」と告白するとき、私たちは、このことに思いを致して、慰められ、励まされるのです。

## よみがえり

そして、もしキリストがよみがえらなかったのなら、あなたがたの信仰はむなしく、あなたがたは今もなお、自分の罪の中にいるのです。

コリント15:17

### 1. 復活についての検討

「三日目に死人のうちよりよみがえり」という、復活の告白は、キリスト教の教えの中心となるものです。しかし死んだ人が甦るということは、常識を超える特別な事件です。福音書も、マタイ28:17、ルカ24:13-41、ヨハネ20:25などで、半信半疑の弟子たちの姿を記しています。弟子でさえ疑ったのですから、ローマやユダヤの当局も、多分疑ったと思うのですが、彼らは反証を挙げる事が出来ませんでした。それどころか、弟子たちの宣教活動は、復活を契機として燃え上がりました。なぜでしょうか。聖書の証言を通して学んでみます。

#### (1) 預言された出来事

パウロは、使徒13章の説教の中で、イザヤ55:3を引用して、キリストの復活は預言されたことだ、と語り、コリント15:4にも、「聖書に従って三日目によみがえられた」と書いています。

ペテロも、使徒2章の説教で、詩篇16:8-11を引用して、キリストの復活は預言されたことだ、と語りました。

旧約聖書には、幾つかの出来事がキリストの復活の型として示されています。例えばアブラハムがわが子イサクを神に献げようとしたことです。彼は、「神には人を死者の中からよみがえらせることもできる」と信じ、イサクを献げたことで、型となりました(ヘブル11:19)。また、主ご自身も、ヨナが三日三晩大魚の腹の中にいた体験を、型として引用されています(マタイ12:40、ルカ11:30)。

#### (2) 主イエスご自身の予告

主イエスは「わたしは神の神殿をこわして、それを三日のうちに立て直せる。」と言われました。主イエスは、ご自分のからだを指して神殿と言われたのですが、ユダヤ人たちはそのことに気が付かず、主イエスを死刑にするための証拠にしました(ヨハネ2:19-22、マタイ26:60-61)。

三日目に復活するという、ご自身の明確な予告があります(マタイ16:21、17:23、20:19、マルコ8:31、9:31、10:34、ルカ9:22等)。

#### (3) 目撃者の証言

使徒の働きに記された13の説教のうち11までが、復活を、論争の余地のない事実として、その中心に据えたものでした。このように、キリストの復活の出来事が説教の中心に据えられたのは、彼らがキリストの復活の目撃者であったからです(コリント15:5-6には、復活の目撃者が大勢いる、と書かれています)。

弟子たちは、自分たちはキリストの復活の証人であると告白しています(使徒2:32、3:15)。

使徒1:15-26には、キリストを裏切ったユダの代わりに、復活の証人を、キリストの弟子として選んだ、と書いてあります。

御使いの証言もありました(マタイ28:1-7、マルコ16:1-7)。

### 2. 復活を確信して

復活が説教の主題になっただけでなく、教会は、西暦56年頃にはすでに、復活の記念日である日曜日に、礼拝を守るようになっていました(参考:使徒20:7)。キリストの復活を確信して、教会は大きく変わったのです。

主イエスの死で落胆し臆病になっていた弟子たち(マルコ14:50・66-72、ヨハネ20:19)は、僅か数週間うちに、キリストの復活の証人へと、それこそ劇的に変貌しました。

弟子たちへの迫害者だったサウロ（後のパウロ）は、復活のキリストに遭遇して、回心し、教会の指導者になりました（使徒 9：1-20）。

異邦人キリスト者だけでなく、ユダヤ人キリスト者も、早くから主の日（日曜日）を守り、聖餐を祝うようになりました。彼らは、安息日（土曜日）がユダヤ人にとって聖なる日で、主イエスも守られたにもかかわらず、そうしたのです。

復活が伝道を中心として宣べられるようになり、そして主日と教会は今日まで続いています。

### 3．復活の主の恵みを受けて

それではキリストの復活によって、私たちはどのような恵みを受けているのでしょうか。

罪とその赦しは、私たちにとって、とても大事な問題です。キリストは、その私たちの罪のために十字架で死なれ、私たちが義とされる（神に愛されるようになる）ために復活されました（ローマ 4：25）。ここに救いの御業が完成したのです。

私たちは、罪の支配から解放されて、復活のキリストと聖霊の御導きにより、新しい歩みが出来たようになりました（ローマ 6：4-9）。

キリストの復活のゆえに、私たちは、人生が永遠の生命の流れの中の歩みであって、死によっては終わらないことを信じられるようになりました。

キリストの復活は、私たち自身の復活の保証なのです（ローマ 8：11、コリント15：12）。

私たちは、信仰生活が孤独な一人旅ではないことを信じます。生きている限り、私たちは、様々な問題に直面しますが、復活されたキリストが相談者としてそこにおられ、助け、慰め、守って下さるからです（マタイ28：20）。

十字架で死んだだけなら、キリストが死に勝ったとは言えません。復活されたからこそ、その証人として教会が生まれ、私たちの救いがあります。復活は信仰の確かさの本<sup>もと</sup>なのです（コリント15：14）。

## 天にのぼり

そして、こう言った。「ガリラヤの人たち。なぜ天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たときと同じ有様で、またおいでになります。」

使徒 1:11

二つの天：

ソビエトの宇宙飛行士ティトブが、「私は宇宙へ行って見たが、そこには神なんかいなかった。」と話しました。それを聞いて、アメリカの宇宙飛行士グレンは、「私が信じる神は、宇宙船の窓越しに見られる方ではない。」と答えました。

この会話の中で、ティトブが考える天は、英語の sky に相当する、物理的な場所を指します。一方、グレンの天は、英語の heaven に当たる、神の臨在を象徴する栄光の場所を意味します。キリストが上られた天は、勿論後者です。

### 1. 天にのぼり

使徒 1: 3-12は、キリストの昇天を、ありありと描いています。それは、復活から40日目に、エルサレム郊外のオリーブ山で、弟子たちが見つめている中で起きました。この出来事については、マルコ 16: 19、ルカ 24: 51、ヨハネ 20: 17、エペソ 4: 8 (詩篇 68: 18を引用)、テモテ 3: 16などにも記されています。

このように聖書は、キリストの昇天が、幻ではなく実際に起こった出来事であり、しかも多くの人々がそれを目撃した、と述べています。

でも私たちは、昇天の出来事を目撃していませんし、昇天される前の主イエスのお姿も知りません。それなのに私たちが、今主イエスを信じていられるのは、昇天された主が、私たちのうちにいて下さる (ローマ 8: 10) からなのです。

### 2. 全能の父なる神の右に座したまえり

使徒信条は、昇天されたキリストが、「全能の父なる神の右に座っておられる」と告白します。

#### (1) 全能の父なる神

前に学んだように、使徒信条では神を全能の父と呼びます。私たちの父なる神は慈愛に満ちた「父である神」であり、不可能なことも可能にされる神であります。私たちは、その神の愛と全能性に全面的な信頼を寄せているのです。

#### (2) 神の右に

神は霊であり、肉体を持っておられませんから、右も左もありません。それなのにどうして神の右に座っておられる、と告白するのでしょうか。

右または右手は、旧約でも新約でも特別の意味を持っています。右手は力であり (ヨブ記 40: 14、詩篇 45: 4)、祝福を与える手でした (創世記 48: 14、黙示録 1: 17)。また右側は救い手が立つ側であり (詩篇 16: 8、109: 31、121: 5)、光栄の座でもありました (列王記 2: 19、詩篇 45: 9)。

東向きに建てられていたエルサレムの神殿の南側 (= 右側) に宮殿があったのも、神殿に臨在される神の右が、神に次ぐ (王的な支配の) 座であることを示しています。

詩篇 110: 1の「わたしの右の座に着いていよ」は、新約の「神の右に座したまえり」の本<sup>もと</sup>となったものです。主イエスご自身も受難前にそう預言され (マタイ 22: 44、マルコ 14: 62)、福音書も、そのようになった、と記しています (マルコ 16: 19)。またペテロも (使徒 2: 33-35、ペテロ 3: 22) パウロも (ローマ 8: 34、エペソ 1: 20-21) そのことを重要な事実として証言しています。

神の右の座におられるということは、まず、人となって一時的に神と離れ、十字架の苦しみまで受けられた主イエスが、救いの御業を全うされて、再び神と共におられるようになったことを意味します。

このことはまた、主イエスが、神の審きの権限を与えられ、審かれた者から審き主になられたということでもあります。主イエスは、王の王としてそのふさわしい座に着かれたのです。

神の右の座におられる、この主から、私たちは、次のような恵みを受けています。

キリストは、私たちの主、また王として、万物を支配されています（コリント15：25 - 27）。私たちは、この、主の支配を確信し、その視点から歴史を眺め、自分の生活を整えることが出来るのです（コロサイ 3：1）。

キリストは、父なる神に向かって、いつも私たちのために執り成して下さいます（ローマ 8：34）。この執り成しがあるからこそ、私たちは、何度でも悔い改め、父なる神のみもとに立ち帰ることが出来るのです。

### (3)座したまえり

ラテン語本文では、「座したまえり」は現在形で書かれています。昇天されたキリストは、今現に、神の右に座しておられるのです。

地上の祭司は、献げるものが動物の犠牲<sup>いけにえ</sup>で、罪を除けず、繰り返し献げる必要があったので、聖所では立って礼拝の務めをしました。しかしキリストは、自らを犠牲として献げることで、一回切りで贖いを完了されて、大祭司の務めを全うされたので、座しておられるのです。聖所内にある座ではなく、天の神の右の座に、です（ヘブル10：11 - 12）。

主イエスの死は、弟子からの別れでした（マルコ14：7）。しかし、昇天される主から、「いつも、あなたがたとともにいます（マタイ28：20）。」という恵みの約束が弟子たちに与えられました。

私たちは、「天にのぼり、全能の父なる神の右に座したまえり。」と告白するとき、天にのぼられたからこそ、キリストが私たちの身近な存在となる、この不思議な恵みを思い起こすのです。

## 審きたまわん

私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになる

コリント 5:10

けれども、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

ピリピ 3:20

過去・現在・未来：

使徒信条の、主イエス・キリストについての告白は、独り子イエスが人間となられたことに始まり、その苦しみ、生涯、死、復活、昇天と続きました。ここまでは二千年前に起こった救いの出来事の告白です。それに続く「父なる神の右に座したまわり」は、前回学んだように、今現に与えられている恵みについての告白です。

この過去と現在の事実についての告白と違って、「かしこより来たりて生ける者と死ねる者とを審きたまわん。」という告白は、未来の事柄についてのものです。

審きのためのキリストの再臨を、キリスト者は、救いが完成される日として待ち望んでいます。審きの日がなぜ望みの日になるのか、この項では、その辺のことも学んでみたいと思います。

### 1. かしこ(彼処)より

「かしこ」は、「あそこ」の文語的表現で、昇天されたキリストがおられる神の右の座を指します。前回学んだように、天は、物理的な空間ではなく、神とキリストが共におられる所の象徴的表現です。ですから、「かしこより来たりて」という表現は、目の前の青い空から降りて来られるというわけではなく、神がおられる天から来られる、ということを経験して言っているのです。

### 2. 来たりて

「来たりて」は「再臨」のことです。私たちは、ただ何となく、明日が来れば朝が来る、人類の歴史もまだまだ続く、と考えています。再臨なんか先のことだと高を括りがちです。しかしキリスト教は、二千年の間、再臨を待ち望んで来ました。その日に救いが完成する、と聖書に書いてあるからです。

#### (1) 聖書が描くその日

キリストが、昇天された時と「同じ有様で、またおいでになります(使徒 1:11)」。

死者が、信仰者も不信者もみな復活します(ヨハネ 5:28)。

すべての人は、「各自その肉体にあってした行為に応じて(コリント 5:10)」審かれます。

しかし、信仰者は、キリストの「栄光のからだと同じ姿に変え(ピリピ 3:21)」られます。

信仰者にとってその日は、救いが完成され、神の国に入れて頂ける日となります(ヘブル 9:28)。

神の正義が支配する、新しい天と地が完成します(ペテロ 3:13)。

#### (2) その日はいつ来るか

このことについて主ご自身は、「その日、その時がいつであるかは、だれも知りません。天の御使いたちも知りません。ただ父だけが知っておられます(マタイ 24:36)」と語っておられます。

でも初代教会の人々は、間もなくその日が来ると信じていたようです。コリント 16:22の「主よ、来てください(マラナ・タ)」は、聖餐式のたびに献げられた祈りの言葉です。一日も早く救いの完成を強く待ち望んでいたのです。

でもなかなか来ません。再臨が遅れているように見えるのはなぜでしょうか。聖書は、神が「ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる(ペテロ 3:9)」からだを教えています。

### 3. 生ける者と死ねる者とを

主イエスは、「生きている者と死んだ者とのさばき主として、神によって定められた方」です。弟子たちは、そのことを「人々に宣べ伝え、そのあかしをするように」と主イエスから命じられました（使徒10：42）。

ここで「死んだ者」というのは、キリストが再び来られるまでに死んだ全人類を意味します。死者も審かれるという教えは、他の宗教には無いような気がします。しかしキリスト教の神は、天地の造り主であり、この世の初めから終わりまでそのすべてのことを治める方です。神には、過去・現在・未来という時間の制限はなく、既に死んでいる者であっても、神の審きから免除される人はいません。すべての人が審かれるのです。

### 4. 審きたまわん

すべての人が審かれますが、聖書は、その審きの基準として一つのことを教えています。それは「神を知らない人々や、私たちの主イエスの福音に従わない人々」が「主の御顔の前とその御力の栄光から退けられて、永遠の滅びの刑罰を受ける（テサロニケ 1：8 - 9）」ということです。

しかし私たちは、主イエスの十字架によって既に罪から贖われています（エペソ 1：7）。そのことを信じた私たちにとって、キリストは、この終末の審きから「私たちが救い出してくださる（テサロニケ 1：10）」方であります。だからこそ審きの日、キリストが救い主として来られる、望みの日になるのです（ピリピ 3：20）。

再臨の日まで、私たちは「目をさましていなさい（マタイ24：42）。」という、主イエスの命令の下もとに置かれています。救いが完成されるその日まで、私たちは、「心を引き締め、身を慎み、」その日に「もたらされる恵みを、ひたすら待ち望み」続けるのです（ペテロ 1：13）。

## 聖霊を信ず

しかし、助け主、すなわち、父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊は、あなたがたにすべてのことを教え、また、わたしがあなたがたに話したすべてのことを思い起こさせてくださいます。ヨハネ14：26

聖霊によるのでなければ、だれも、「イエスは主です。」と言うことはできません。

コリント12：3

三位一体：

神を父・子・聖霊として信じることを、<sup>さんみいつたい</sup>三位一体と言います。これは、聖書にも使徒信条にも出て来ない言葉で、教会が、異端との対決の中で、4世紀頃までに確立したものです。言葉自体は難解に見えますが、使徒信条が告白するように、父なる神を信じ、主イエス・キリストの救いを信じ、聖霊の助けを信じていれば、それが三位一体なのです。

三位一体の「位(=位格)」は、古代の演劇用語であるペルソナ(仮面、登場人物、俳優)というラテン語から来しました。当時の演劇の俳優は、仮面を使い分けて、一人で何役も演じたそうです。仮面をかぶっていても、演じている俳優が誰であるか観客には分かっていた。このペルソナという言葉を使つて三つであつて一つの神を説明するのに使ったのです。つまり神が、造り主(父)・救い主(御子イエス)・助け主(聖霊)としての役を演じておられるというのです。

### 1. 聖霊についての告白

使徒信条は、神については、天地の造り主、全能の父と告白し、主イエスについては、どのような方で、かつて何をなさったか、いま何をなさっているか、これから先何をなさるかと告白します。しかし聖霊については、ただ、「聖霊を信ず。」と告白するだけです。なぜでしょうか。

その理由は、使徒信条が作られた頃の初代教会にとって、一番の問題はキリスト論で、あまり問題になっていなかった聖霊論は、簡単な表現で済ませたということらしいのです。

### 2. 聖書に記された聖霊の働き

#### (1) 旧約聖書の聖霊は

創造の代行者として働き(創世記1：2)、人間を内側から道徳的に聖め(ネヘミヤ9：20)、幕屋建設に際して知恵と知識を与え(出エジプト31：2-4)、指導者を奮い立たせ(士師記6：34)、荒廃した世界を造り変える、原動力となりました(イザヤ32：14-15、エゼキエル37：1-10)。しかし、最も注目される聖霊の働きは、預言者を起こして、神の言葉を人々に伝えさせることでした(申命記18：18、サムエル23：2)。

#### (2) 新約聖書の聖霊は

##### 聖霊と主イエス・キリスト

- ・主イエスの誕生は聖霊によるものでした(マタイ1：18, 20、ルカ1：35)。
- ・バプテスマを受けられたとき、神の御霊が、主イエスに下りました(マタイ3：16)。
- ・御霊に導かれて荒野に上られ(同4：1)、御霊によって悪霊を追い出されました(12：28)。
- ・主イエスが神の言葉を話されたのは、神が御霊を無限に注がれたからです(ヨハネ3：34)。
- ・主イエスは「とこしえの御霊によって」ご自身を神に献げられました(ヘブル9：14)。

##### 聖霊と父なる神

- ・聖霊は、父なる神の約束によって、弟子たちに与えられました(使徒1：4-5)。
- ・御霊は、父なる神の御心を知っておられ、それを人々に伝えます(コリント2：10-11)。
- ・父なる神は天にいまし(マタイ6：9)、御霊は教会の中に宿られます(コリント3：16)。

## 聖霊と教会

- ・聖霊は教会に力を与えます。聖霊こそが教会の福音宣教の原動力です（使徒 1：8）。
- ・教会は、五旬節の日に聖霊の注ぎによって建てられました（使徒 2：1-4）。

## 聖霊と信者

- ・神は、語りかけるだけでなく、私たちが心を開くよう、御霊として、私たちの中に入り込んで来て下さいます（ヨハネ 3：24, 4：13）。
- ・聖霊は、私たちを「イエスは主です。」という告白に導いて下さいます（コリント12：3）。
- ・御霊ご自身が、私たちが神の子供であることを証しして下さいます（ローマ 8：16）。
- ・御霊は、すべての信者をキリストの体に属する者として結び合わせます（コリント12：13）。
- ・聖霊はすべてのことを教え、主イエスの言葉を思い起こさせます（ヨハネ14：26）。
- ・御霊は、祈りの中で、弱い私たちを助け、執り成して下さいます（ローマ 8：26）。

## 聖霊と未信者（ヨハネ16：8-11）

聖霊は、未信者に、主イエスについて証しして、罪と義と審きを悟らせませす（8）。

- ・罪の認識：主イエスを信じないことが罪の根源であることを認めさせませす（9）。
- ・義の証し：主イエスの言葉と業の正しさが復活によって証明されたことを証しませす（10）。
- ・審きの確信：主イエスの復活によって悪の力が既に審かれていることと、やがて来る神の審きの確かさを証しませす（11）。

私たちが主イエス・キリストを信じたのは、知恵や人生経験によるのではなく、ただ、聖霊の導きによるのです。特別な聖霊体験がなくても、キリストを信じ、救いを受けているのなら、もう十分に聖霊の導きを受けているのです（コリント12：3）。聖霊を信じるということは、「私も聖霊に導かれている。」と信じることなのです。

## 言葉の解説

### 【助け主】

ギリシア語はパラクレートスで、「援助のために側に呼ばれた者、執り成してくれる人」という意味の言葉です。特に、法廷に呼ばれて裁かれる人のために弁護する人がこう呼ばれます。新約聖書では、ヨハネだけが記録している言葉で、主イエス・キリストと聖霊のお二方に使われています。

### (1)主イエス・キリスト

私たちは、罪を犯さないようにしようと努めるのですが、現実には失敗の連続で、思い悩むことばかりです。しかし慰めがあります。それは「もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の御前で弁護して下さる方があります（ヨハネ 2：1）。」という御言葉です。「なだめの供え物（同 2）」であるキリストが、神の御前で私たちのために弁護して下さいます。

### (2)聖霊

主イエスは、弟子たちと共にいて、彼らを教え、導き、励ましておられましたが、ご自分が去られた後に、「もうひとりの助け主」を、神が弟子たちにお与えになると約束されました（ヨハネ14：16）。主イエスが天に上られてからは、この助け主である聖霊が、弟子たちの力の源泉となり、真理の導き手となりました。

聖霊はいま、私たちの中に住まわれて、私たちに主イエスの御言葉や御業のすべてを思い起こさせ、それと私たちとを結び付けて下さっています。その聖霊が、この私にも与えられ、助け主として導いて下さっているのです。

私たちは、御霊を受けているので、神を「アバ、父。」と呼ぶことが出来ます。その確信が揺らぎそうな時にも、御霊ご自身が、私たちが神の子であることを証しして下さいます（ローマ 8：15-16）。

聖霊は、神から与えられる何か神秘的な力というようなものではなく、私たちの救いのために働いて下さる神（=助け主）ご自身なのです。

## 聖なる公同の教会

キリストがそうされたのは、みことばにより、水の洗いをもって、教会をきよめて聖なるものとするためであり、  
エペソ 5:26

教会に関する告白：

前回、聖霊については、「我は聖霊を信ず。」と告白するだけだと書きました。でも実は、この告白に続けて、聖なる公同の教会、聖徒の交わり、罪の赦し、身体からだのよみがえり、永遠とこしえの命と、聖霊が与えて下さる賜物を五つ挙げて、それらを信じると告白するのです。

使徒信条が今の形になるまでには、多くの年月が掛かりました。そのため、初期のものと今私たちが使っているものとは、幾つかの違いがあります。教会に関する告白も、初期のものは「聖なる教会」だけを告白していましたが、後のものでは「公同」という言葉が入り、「聖なる公同の教会を信ず。」と告白するようになりました。

### 1. 聖なる教会

現実の教会には、いろいろ問題があって、聖なる教会とは呼びにくいのが実状です。聖書の中でも、例えば、コリントの教会には、分派(コリント 1:10-12)や不品行(同 5:9-13)の問題がありました。それでもパウロは、その教会に向かって、「コリントにある神の教会へ。聖なるものとされた方々へ(同 1:2)。」と書き送っています。「聖なる」と呼んでも、教会やそこに集まる人々が聖きよいと言っているのではなさそうです。では、どうして「聖なる教会」と告白できるのでしょうか。

(1)それは、教会が聖なる神のものだからです。

教会は、「神がご自身の血をもって買い取られた(使徒20:28)」ものです。聖なる神のものですから、教会を聖なるものと告白するのです。

(2)教会がキリストの体だからです。

教会はキリストの体です(エペソ 1:23)。教会は、キリストに拠って立つもので、キリストとの救いの交わりの中にあるものですから、聖なるものと告白するのです。

### 2. 公同の教会

「公同の教会」はラテン語のエクレシア・カトリカの和訳です。カトリック教会は、プロテスタント教会と区別して、自らをカトリックと呼びますが、カトリックという言葉は、ギリシア語のカトリコス(普遍的・一般的)が、ラテン語のカトリカを経て現代語になった、ごく普通の形容詞です。

「公同の教会」が使徒信条に入ったのは、いつ・何処で・誰に建てられた教会であっても、その教会に教会の要素がみな揃ってさえすれば、全世界にある他の教会と共通性を持っている、ということを示すためでした。つまり教会は全世界を治められる神のものであり、全世界の教会がキリストの体において一つである、ということを感じて、教会が公同の教会であると告白するのです。

### 3. どんな教会が公同の教会でしょうか。

キリスト教会は、カトリック、オーソドックス、プロテスタントと、大きく三つに分かれています。

カトリックとオーソドックス(東方正教会)は、歴史や制度・組織という面ではプロテスタント教会よりずっと古いのですが、教会の本質的な在り方よりも、外形的な伝統を強調し過ぎる感じがします。

一方プロテスタント教会は、「公同の教会」とは、特定の伝統や歴史や制度によって決まるものではなく、教会の基が何処にあり、教会の働きが何を示しているか、によって区別されるべきだと主張しています。つまり御言葉が正しく宣べ伝えられ、聖礼典(聖餐式と洗礼式)が誤りなく行なわれ、キリストとの交わりの中にあれば、それは「公同の教会」だと言うのです。

#### 4. 教会の必要性

教会が「聖なる」ものであっても、その中には、様々な問題を抱えています。建物としての教会から離れて、家庭集会や聖書研究会を中心に信仰生活を送ろうとする無教会主義が生まれたのも、このような現実からです。私たち信仰者にとって、教会は、どのような意味で必要なのでしょうか。

##### (1) 教会は現実に存在するキリストの体です。

教会はキリストの体です(エペソ 1:23)。私たちは、このキリストを救い主と信じて、それを告白し、バプテスマを受けて、キリストの体である教会に組み込まれ、その肢とされました(同 1:28)。キリストを信じるということは、この一連の事実を受け入れるということで、教会生活抜きの信仰生活は考えられないのです。

##### (2) 教会は信徒の母です。

私たちは、信仰生活を守るのに便利だから教会に来たのではなくて、召されて、キリストの体である教会に加えられ、その肢とされたのです。教会で、私たちは、説教と聖礼典を通して神の恵みを受け、また信仰の訓練の場を与えられています。そのような意味で、「教会は信徒の母」なのです。

#### 5. 教会を「信じる」

父なる神、主イエス・キリスト、聖霊、を信じるという場合の信じる(Credo in)と、教会を信じるという場合の信じる(Credo)とは、意味が違います。父・子・聖霊は信仰の対象ですが、教会は、直接、信仰の対象とはならないのです。

教会を信じるということは、教会がキリストの体であることを信じ、私たちが、キリストの十字架によって救われた者であることを信じ、さらにその私たちが、キリストの証言者として召されて集まり、キリストの体である教会を建て上げさせられていることを信じることなのです。

#### 言葉の解説

##### 【エクレシア(教会)】

エクレシアは、ギリシア語の、エク(~から)とカレオ(呼び出す)を組み合わせて出来た言葉で、原意は「呼び出された者の集まり」です。「神の民の集まり」を意味するヘブル語「カハル」の訳語、つまり「教会」を表わす言葉として使われています。

聖書の中で、エクレシアは、神の召しに呼ばれて、この世のただ中から集められた「選ばれた共同体」「聖徒の群」を意味します。単なる人間の共同体ではなく、何よりも、復活の主イエス・キリストとの出会いによって呼び出された者たちの共同体です。ラテン語もエクレシアのままです。使徒信条の中に出てくる「教会」は、エクレシアです。

##### 【世界の教会】

##### (1) カトリック教会

カトリック教会は、自分たちは主イエスから直接教会を託されたペテロ(マタイ16:18)を初代教皇として連綿と続いており、世界の教会は教皇を頂点として一体であるべきだ、と主張しています。世界で10億2,559万人、日本では43万8千人が信者です。

##### (2) オーソドックス(東方正教会)

東方正教会は、ギリシア正教会とロシア正教会の二つをいい、1054年にローマ教会と分かれました。使徒時代の伝統の忠実な継承者を自認しています。カトリック教会と違い統一組織にこだわらず、独立教会が、交わりを保ちながら存在しています。世界で1億7,042万人、日本では2万6千人が信者です。

##### (3) プロテスタント教会

プロテスタント教会は、ルター、ツヴィングリ、カルヴァン等の宗教改革者が使徒たちの信仰の回復を図ったことから、16世紀に始まりました。

ルター派・長老派・バプテスマ派・メソジスト派・ホーリネス派等々、多くの教派があります。世界で3億7,370万人、日本では60万人が信者です。

(注)教勢は1996年版日本キリスト教年鑑から。但し世界の数値は1993年版ブリタニカからの転載。

## 聖徒の交わり

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。

コリント 1: 9

イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。ヘブル10: 10

聖徒の交わり:

「聖なる公同の教会、聖徒の交わり」と一気に口にしますので、この二つは、一緒の項目で扱っても構わないようにも思えます。しかし、「聖徒」にも「交わり」にも、私たちが心に留めて置くべきことが含まれていそうです。それに、「聖徒の交わりを信ず。」とはどういうことなのでしょう。

### 1. 聖徒: 信徒に対する呼び名

聖徒という言葉は、聖人という言葉に似ていますし、英語の聖書でもsaintと訳されていたりして、遥か高みにいる人のように聞こえます。

でも私たちは、聖徒と呼ばれるのに相応しい生活などしていません。評価されるものもありません。いつも罪を犯しています。それなのに私たちが聖徒と呼ばれるのは、神が私たちを聖徒と認めて下さるからに過ぎません。罪人を聖徒と認めて下さるこの恵みが、「義認」と「聖化」です。

### (1) 義認: 義と認められる

キリストが罪の代価である死を私たちに代わって払って下さったことで、私たちの罪は赦されました(マタイ20: 28)。私たちは、この恵みを信じて義と認められました。罪と全く無関係になったわけはありません。過去も現在も罪を犯し、これからも罪を犯すのに、ただ神の恵みによって、「価なしに義と認められ(ローマ 3: 24)」たのです。

### (2) 聖化: 聖くされる

「義と認められた」私たちは、「キリストが清くあられるように、自分を清く(ヨハネ 3: 3)」したいと願うようになります。「罪から解放されて(義認)神の奴隷となり、聖潔に至る実(聖化)を得(ローマ 6: 22)」たのです。

しかし、「召しにふさわしく(エペソ 4: 1)」歩もうとはしても、私たちは、努力すればするほど自分の中の罪に気付き、その罪を赦して下さるキリストの愛に立ち戻ることになります。「私たちの全生涯が日毎の悔い改めとなる(ルター)」たのです。

義認は、私たちが審きに耐えられるように、神が私たちの罪を御子に負わせて下さった(コリント 5: 21)、一生に一度与えられる神の恵みです。

それに対して、聖化は、私たちの中に住まわれている聖霊(ヨハネ14: 17)によって、私たちが次第に聖められていくという、生涯を通じて注がれる、恵みの御業なのです(ペテロ 1: 5)。

### 2. 交わり

ヨハネ 1: 3に、「私たちの交わりとは、御父および御子イエス・キリストとの交わりです。」とあるように、聖徒の交わりは、一人一人の信仰者とキリストとの交わりが、横に広がって展開します。

この交わりの中で、私たちは、神から与えられた恵みを分かち合い(ローマ12: 6- 8、エペソ 4: 7- 13)、励まし支え合い(ピリピ 2: 1- 4)、愛し合い(ペテロ 4: 8)、仕え合い(同10)、喜びや悲しみも分かち合うようになって、お互い喜びに満たされます(ヨハネ 1: 4)。

この交わりは、人の利益や願いが中心ではなく、「みこころが天で行なわれるように地でも行なわれますように(マタイ 6: 10)」と祈り求める交わりです。この交わりは、キリストが中心におられて横に広がるものなので、教派や国境を越えた広がりを持ち、「聖なる公同の教会」へと発展します。

## 言葉の解説

### (1) 真の交わり

どんなに強い団結を誇る共同体でも、神に根拠を置いていなければ、その強さには限りがあり、真の交わりとは呼べません。

信徒の交わりも完全ではありません。しかし神が信徒を義と認めて下さり、聖徒として生きることが出来るように助けて下さると同じように、信徒の交わりは、神が真の交わりとして認めて下さり、真の交わりになれるように助けて下さいます。だからこそ使徒パウロは、祝祷文にまで、神による交わりを入れたのです（コリント13：13）。

### (2) 信仰生活と交わり

初代教会では、キリストを信じる人々が集まり、祈りと賛美を共にしながら、信仰を深め合っていました（使徒2：41-47）。「教会や信徒に問題があるから一人で信仰を守る。」という人もいますが、多くの問題を抱える教会や信徒であっても、それを聖なるものとして下さる神の恵みと助けまで忘れるわけには行きません。神は、神を信じる人々の交わりが、他のどんな共同体よりも完全なものになり、そこに真の交わりが育つようと、大いなる恵みを注いで下さる方なのです。

### 3. 「聖徒の交わりを信ず」

私たちは、「この世の取るに足りない者や見下されている者（コリント1：28）」なのに、神に召されました。私たちは、恵みの賜物を持ち寄って、教会に集められています。それぞれの賜物が生かされることによって、キリストの体が建て上げられています。自分の受けている賜物を卑下も誇りもしないで持ち寄り、持ち寄った賜物を分かち合い、そのことを通して、自分自身が生かされるのです。

私たちは、教会がキリストに属する者の交わりであることを信じ、その中で自分自身が生かされていることを信じて、「聖徒の交わりを信ず。」と告白するのです。

### 【聖徒】

ギリシア語はハギオスで、「聖なる者」「聖め分かたれた者」という意味を持ちます。新約聖書には61回出てきますが、そのうちマタイ27：52が葬られていた信者を指すほかは、すべて新約時代のキリスト者を指しています。

聖徒は、主イエスに対しては弟子、同信の友に対しては兄弟です。完全無欠な人を指す聖人君子とはもちろん違って、主イエス・キリストの十字架の血によって罪を聖められ、その血に免じて罪が無いとみなされ、神の御用のために世から選り分かれた「罪赦された罪人」を指すのです。

### 【交わり】

ギリシア語はコイノニアです。もともとの意味は「共有する」「分かち合う」で、そこから人間同士の交友や友好関係を示す言葉となりました。

新約聖書では、「キリストのいのちを共有する」ということから、三位一体の神との交わりや信仰者同士の親交を示す表現として使われています。

旧約聖書では、神がその民と共におられるという思想はあるのですが、コイノニアのように、神との交わりを示す言葉は見当たりません。イエス・キリストの贖罪によって、初めて、神との交わりが完全に回復されたのだからです。

神との交わりに召し入れられた信仰者は、その交わりを他の人と分かち合おうと努めます。これが、聖徒の交わりです。

### 【チャーチ（教会）】

チャーチ（教会）の語源は、「主のもの」という意味のギリシア語「クリアコン」です。この言葉が「主の家」「主に属する家」という意味で使われるようになり、やがて教会を意味するようになり、つまり主イエス・キリストを主人とする家族が作る家が教会だということです。

## 罪の赦し

もし、私たちが自分の罪を言い表わすなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。

ヨハネ 1: 9

神は、罪を知らない方を、私たちの代わりに罪とされました。それは、私たちが、この方であって、神の義となるためです。

コリント 5: 21

罪の赦しを信ず：

聖霊に対する信仰の項目として、教会生活の中の恵みの賜物である「教会」と「交わり」を信じて告白しました。続いて使徒信条は、「罪の赦し」「<sup>からだ</sup>身体<sup>とこしえ</sup>のよみがえり」「永遠の命」を挙げて、この三つを信じて告白します。

これらのものは、聖霊の助けを信じたら、自分の生活の中に具体的に入ってくる、恵みの賜物です。このうち「身体<sup>からだ</sup>のよみがえり」と「永遠<sup>とこしえ</sup>の命」は、既に約束されているけれども、まだ時が至っていません。しかし「罪の赦し」は、救い主イエス・キリストに対する信仰を持つ者に既に与えられている、現実のものです。

### 1. 罪の意識

私たちは、悪や罪は避け、善と純潔を求めようとします。でもそのように努力すればするほど、罪の影響の方が善を追求する努力より強く、自分自身が、悪や罪に支配されていることに気が付きます。この世に規則・法律・道徳など罪を犯さないための教えや仕組みが沢山あるのに、罪や間違いを犯したことに、後で気が付く始末です。

パウロも、聖書の中で「私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか(ローマ 7: 24)。」と、罪の意識の苦しみを語っています。

## 2. 聖書が教える罪

### (1) 旧約聖書の罪

旧約聖書の罪は、本質的には、神に対する罪で、罪：目標や道を外<sup>はず</sup>すこと、咎、背き、過ちなどに大別されます。人類の始祖アダム<sup>アダム</sup>の犯した罪も、神との約束から外れ、神の命令に背いたということでした。またイスラエルが預言者たちに責められたのも、彼らが、神から与えられた律法に従わず、その目標から外れたからでした。

### (2) 新約聖書の罪

新約聖書で罪を表す中心的な言葉は、罪：目標や道を外すことですが、そのほかにも、不敬虔、不従順、不義・不正・悪、違反、不法、負いめ、過ち・罪過など、旧約聖書に比べると、より多くの言葉が使われています。

### (3) 聖書の罪理解

私たちは、罪を法律を破ることに限って考えがちです。しかし聖書が語る罪は、人間が神との正常な関係を破ることを指しています。その意味での罪の中にいる限り、私たちは、神の前に立てないし、神の審きに耐えられないというのです。これが聖書の教える罪理解です。

しかし大切なのは、罪理解だけでなく、その罪をどのように解決すればよいかということです。罪は、私たちが解決しなければならぬ、或いは赦されなければ生きて行くことが出来ない問題だからです。人間の命は心臓が動く限り持続しますが、聖書は、罪の問題を解決しない限り、人は人らしく生きることが出来ない、と語るのです(ローマ 6: 23)。

罪の赦しのために、旧約時代は犠牲<sup>いけにえ</sup>の動物を献げました。神は形式的な献げ物よりも「砕かれたたましい(詩篇51: 17)」を喜ばれたのですが、人々は形式的に律法を守る道に走り出しました。それに対して主イエスは「悔い改めて福音を信じなさい(マルコ 1: 15)。」と宣言されたのです。

### 3. 罪の解決

罪の問題は、神と人間との関係が根本こんぽんですから、その問題が解決されなくては、完全な解決はありません。しかし神と人間との関係の回復は、人間の方からは出来ないのです。だからこそ神は、その関係の回復のために、神の方から働きかけて下さいました。それが主イエスの十字架の出来事です（マルコ 10：45、ヨハネ 1：29、ガラテヤ 1：4）。

ここで一つの問題が生じます。それは、主イエスの十字架と現在の私たちとの間にある、二千年という時間の隔たりをどう考えればよいか、ということです。普通の感覚で考えると、この両者には、何ら関係がないと思われるからです。

この点について、パウロは、一人の人（アダム）を通して罪がこの世に入ったように、一人の方（イエス・キリスト）によってこの世にいのち（赦し）が入った（ローマ 5：12-18）と教え、ヨハネは、なだめの供え物となったイエス・キリストの御業は全世界（過去・現在・未来の全人類）を対象としている（ヨハネ 2：2）と説いています。

私たちの罪の問題を解決するために来られたイエス・キリストによって、人類のすべての罪が解決できた、というのです。

### 4. 罪を赦されて

罪の赦しは、私たちが自分の信仰生活を振り返るときに、「自分は罪を赦されている」と確認できる事実です。しかしその反面、私たちは、自分自身の陰の部分がいかに醜く卑しいものであるか、知っています。このままでは神の前に立てるはずがないという恐れと、赦されているという喜びとが、私たちの中に同居しているのが実状です。

自分の弱さに打ちひしがれているのではなくて、赦された喜びに有頂天になるのでもなくて、私たちは、赦されているからこそ、なお一層奮い立って、後から後から現われる、自分の中の罪と戦うのです。神の恵みに応えるために、です。

## 言葉の解説

### 【新約聖書の罪】

(1) 罪：目標や道を外すこと（ハマルティア）

本来は「的を外す」ことを表わす一般的な言葉を、「罪を犯す」という聖書特有の意味を表わす言葉として使うようになったもので、具体的な罪の行為にも使います（マルコ 1：5、ヨハネ 8：24、ヤコブ 1：15）が、行為だけでなく、人間が持っている、神に背く性質についても使われます（ヨハネ 8：34、ローマ 3：20、ヨハネ 1：8）。

(2) 不敬虔（アセベイア）

罪を表わす言葉の中では最も語調の強い言葉で、神に対する不信仰のことです（ローマ 1：18）。

(3) 不従順（パラコエー）

神のメッセージを素直に聞かず、聞いてもそれに従おうとしないことで、要するに、御心に従わないことです（ローマ 5：19、コリント10：6）。

(4) 不義（アディキア）

本来は、隣人に対する悪しき行為を意味する言葉です（ローマ 1：18、6：13、テモテ 2：19、ヘブル 8：12）。しかし神の前での罪の状態を表わす言葉としても使われていて、この場合は、「不正」（ルカ18：6、ヨハネ 7：18）や「悪」（テサロニケ 2：10）と訳されています。

(5) 違反（パラバシス）

原意は善と悪との境界を越えることです。聖書では律法違反に使われています（ローマ 4：15）。

(6) 不法（アノミア）

律法を侮り、律法と無関係な生活をするということです（ローマ 6：19、コリント 6：14）。

(7) 負いめ（オフエイレマ）

義務や責任の不履行です（マタイ 6：12）。

(8) 過ち（パラブトーマ）

本来は、知らずに犯した過ち（ガラテヤ 6：1）のことでしたが、神や人に対して道を踏み誤った者の「罪過」（エペソ 2：1）や「罪」（マタイ 6：14、同15、ローマ 4：25）にも使われています。

## からだ 身体のよみがえり

このことに驚いてはなりません。墓の中にいる者がみな、子の声を聞いて出て来る時が来ます。善を行なった者は、よみがえっていのちを受け、悪を行なった者は、よみがえってさばきを受けるのです。ヨハネ 5：28 - 29

キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。ヨハネ 3：2

身体のよみがえりを信ず：

「罪の赦し」に続く聖霊の賜物として、「身体のよみがえり」を信じる、と告白します。キリストが示されたように、終末の時、信仰者は永遠の命に、未信者は審きと滅びに、甦ります(ヨハネ 5：28 - 29)。肉体だけが甦るというのではなく、霊も肉も共に、人間が丸ごと甦るのです。この項では「身体のよみがえり」を信じるこの意味を学びます。

### 1. 超自然的な出来事である甦り

私たちは、理論や経験を通して、死んだ者が生き返らないことを知っています。誰も、自分の力で死を克服することは出来ないのです。

「身体のよみがえり」は、死者が甦るという常識では考えられない超自然的な出来事です。神の力によって死者が甦るといふようなことが起こるのは、神ご自身が、何か特別な目的のためになさることに違いありません。

### 2. キリスト教の歴史観

人間社会の中で起こった出来事を記録したものを歴史と呼びます。すべての出来事を記録するわけには行きませんから、出来事を取捨選択して記録します。この取捨選択の際の、重点の置き方や考え方を歴史観と言います。

創造から終末までのすべての歴史を、神の救いの舞台と見るところに、キリスト教の歴史観の特徴があります。自然界や人間によって歴史が変わったり終わったりするのではなく、神が天地を無から創造し、創造された世界を支配し、その目的に向かって導かれるというのです。

神は救いのご計画の完成のために死者を甦らせ、人間をそれぞれの行為に応じて審かれて、神の国に相応しい人を選ばれます。このことについて聖書は、「私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあってした行為に応じて報いを受けることになる(コリント 5：10)」と語っています。

### 3. 丸ごと甦り

キリストは、神の力によって甦った最初の人となりました(コリント 15：20)。そしてキリストが甦られたという事実(マタイ 28：6、マルコ 16：6)が、キリストが神の子であることを証し(ローマ 1：4)、十字架による贖いの完成のしるしとなり(同 4：25)、さらに、信仰者の甦りの保証となりました(同 6：4、ペテロ 1：3)。

古代ギリシアやローマには、人間の肉体はつまらないもので、やがて朽ちて滅んでしまうが、霊魂は不滅だという考えがありました。霊肉二元論です。

初代教会にも、この考えに影響されて、肉と霊とは関係ないから、肉は快楽に耽っても、霊さえ高尚なことを考えていればいい、と考える人がいました(コリント 6：15 - 16)。

しかし私たちは丸ごと神様のものです。救いは、私たちの霊肉両面にわたって、この私の存在全部を引くくめて起こりました。そして聖書は、私たちが、再臨の時にキリストに似た者になる、と教えています(ヨハネ 3：2)。私たちは、キリストの復活したからだを通して推測し、その時を待ち望んでいるのです。

4. 「身体によみがえり」を信じることは、

(1) 善人も悪人も甦ることを信じることです。

人が死ねば土に帰り（創世記 3：19）、霊は神に帰ります（伝道者12：7）。そして、終末の時が来たら、すべての人は甦ります。神の前で審かれるために善人も悪人も甦るということを、聖書は、一貫して教えています（参考：マタイ25：31 - 46）。

私たちが罪の中にいたままなら、この審きに耐えることが出来ないのですが、主イエスが罪を赦す方であることを信じているから、私たちは、その時を待つことが出来るのです。

(2) 神の国に入ることを信じることです。

パウロは、信徒の死を眠っている（コリント15：18、エペソ 5：14、テサロニケ 4：13）と語りました。これは、信徒にとって死は、主と共に神の国に連れて行かれるためのものだ、と言っているのです。キリストが「眠った者の初穂として死者の中からよみがえられ（コリント15：20）」たことを、私たちは信じています。

(3) キリストの身体に似ることを信じることです。

私たちは、どのような身体で甦るのでしょうか。聖書もこの問題について詳しくは語っていません。ただ、「キリストは、万物をご自身に従わせることのできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じ姿に変えてくださるのです（ピリピ 3：21）。」と語るだけです。私たちは、キリストの復活した身体を通して推測し、その時を待ち望んでいます。

「身体によみがえり」は「罪の赦し」によって与えられるものです。私たちは、神がすでにキリストを死から甦らせたということ、そして私たちが、罪を赦されてキリストに属する者とされているということ、この事実を信じて、「身体によみがえり」を信じ、待ち望んでいるのです。

## とこしえ 永遠の命を信ず

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。ヨハネ11：25

その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。ヨハネ17：3

永遠の命を信ず：

聖霊の賜物の最後に、「永遠の命」を信じる、と告白します。簡単な言葉ですが、内容は難解です。主イエスも、度々永遠の命について語ったり、訪ねて来た人々に教えたりされました。しかし人々は、その教えに失望したり、疑問を抱いたまま帰ったりしました。聖書が教える永遠の命は、常識的に考えられるものとは相当違うようです。

使徒信条の「永遠の命を信ず」という告白には、どういう意味があるのでしょうか。

### 1. 永遠の命に関する一般的な考え

昔から、永遠に生きると考える人は、少なからずいました。例えば、古代エジプト人がそうです。彼らは、死後も生前と同じ生活をすると信じ、死者を生前と同じ状況の下で葬ろうとしました。死者をミイラにして葬ったり、時には生きている奴隷と一緒に葬ったりしたほどです。

永遠に生きることなどあり得ないと考える人々もいます。彼らは、人間の魂は脳の機能の一つに過ぎないと考えます。人が死んだら、脳も肉体と一緒に腐り、後には何も残らないというのです。彼らは、永遠に生きるということは、ただ子孫たちと精神的な関係を持つことや、立派な人がその功績によって人々に記憶されることに過ぎないと言います。このような感覚で永遠に生きると言うだけなので、死後甦って、永遠に生きることなど、彼らにとってあり得ないことなのです。

### 2. 聖書が教える永遠の命

聖書で永遠というのは、いつまでも終わらないということではなくて、来たるべき世に連なっているということです。ですから永遠の命も、主イエスによって甦らされ与えられる、全く新しいキリストの命に連なる、ということなのです。

#### (1) 旧約聖書の永遠の命

旧約聖書では、永遠の命という言葉は、ダニエル12：2にしか使われていません。しかし神に従う者に永遠の命が与えられるという信仰は、旧約聖書の中に一貫して流れています。

神は、神に拠り頼む人を、死のなかに放置せず、死を乗り越えさせて下さる、と人々は信じました(詩篇16：10-11、49：15、ヨブ記19：25)。

終末の時に、神が死に対する勝利を与えて下さると信じました(イザヤ25：8、26：19)。

復活して永遠の命が与えられ、完全な祝福の状態に入ると信じました(ダニエル12：2)。

#### (2) 新約聖書の永遠の命

永遠の命の信仰は、新約聖書では、さらに明確化されました。

私たちは、罪によって、死なねばならなくなりました(ローマ5：12)。

それで、罪の赦しによって、「永遠のいのち」に連なるようにされるのです(ヨハネ3：16)。

キリストは、私たちに「永遠のいのち」を与えるために復活されました(ローマ4：25)。

私たちは、この世で既に「永遠のいのち」を与えられ(ヨハネ5：24)、

新しい歩みを始めていますが(ローマ6：4、コリント6：20)、

決定的にそれに生きられのは、「終わりの日」を迎える時です(ヨハネ6：40、54)。

それは、永遠なる神との永遠の賛美の交わりです(黙示録19：7、21：3)。

このように聖書は、永遠の命が、靈魂不滅や不老不死や輪廻転生といったようなものではなく、死後に、キリストにあって甦らされて与えられる、全く新しい命のことだ、と明確に教えています。

### 3. 「永遠の命を信ず」

永遠の命は、キリストの死と復活を信じた人に、聖霊の賜物として与えられる、約束の恵みです。

キリストの死と復活に与ることによって始まった永遠の命の生活（ローマ 6：3-11）は、キリスト再臨の日に、もう罪を犯さないで済む新しい状態に変えられます（ピリピ 3：20-21）。これが私たちに与えられている約束です。

私たちは、この約束を、罪を赦されたときに保証として与えられましたが、この新しい命の完全な姿は、再臨の日まで、「神のうちに隠されて」います（コロサイ 3：3-4）。

その時に私たちが与<sup>あずか</sup>る永遠の祝福がどんなものであるかということは、残念なことにまだ誰の心にも思い浮かべることが出来ません。なにしろ、聖書に詳しく書いてないのです。かろうじて分かっていることは、私たちが、「キリストに似た者となること（ヨハネ 3：2）」と、神との直接の交わりの中に置かれること（黙示録21：3）だけです。

でも私たちは、その祝福について、今その一部分を知ることが出来、やがて完全に知ることになると約束されています（コリント13：12）。「永遠の命を信ず。」と告白しながら、私たちは、キリストの十字架の死と復活こそ自分が生きている根拠である、という思いを新たにします。

私たちは、礼拝の中で使徒信条を告白しますが、使徒信条は「永遠の命」の告白で終わります。このとき私たちは、いま献げている礼拝が、来たるべき世に連なるわざであることを思い起こし、「御国を相続させていただく（コロサイ 3：24）」幸いに、改めて浸ることになるのです。